



教職大学院 Newsletter No.

7

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

08.11.27

10年後を夢見て

教職大学院がスタートして8か月目に入り、1期生34名の院生は、それぞれの立場で実践研究やインターシップに取り組んでいます。私たち教職大学院のスタッフは、担当の拠点校・連携校を定期的に訪問したり、ストレートマスターを対象に週間カンファレンスを実施したり、さらに、毎月1回、院生全員が一堂に会しての合同カンファレンスも実施したりするなどして、院生自らの実践の振り返りも支援しています。

各学校では、院生以外の教員も含めて協働しながら実践研究に取り組んでおり、大学では、合同カンファレンス等で世代間の交流が盛んに行われています。それらの様子を見ていると、教師教育改革の流れや教職大学院の可能性を肌で感じています。

一方、教職大学院運営協議会を開催し、県教育委員会・市町教育委員会や関係学校等との連携を図っておりますが、特に、県教育委員会には、21年度公立学校教員募集に当たって、採用内定を得た受験生が大学院を修了した場合の「特別選抜」のシステムを創設していただきました。私たちは、教職大学院に対するとても大きな声援だと感謝しております。

さて、10月31日、教職大学院関係機関担当者会議を開催し、教職大学院の現状や21年度学生募集状況、教員免許状更新講習などについて、情報交換・意見交換を行いました。また、当日、文部科学省の教職大学院実地調査があり、大学関係者に対する聞き取りだけでなく、県教育庁の課長・参事や教職大学院の院生に対する直接の聞き取りも行われました。調査の途中に、調査委員の方々が担当者会議の様子を視察される場面もありました。調査委員の方からは、福井大学教職大学院のカリキュラム、教育委員会と

教職開発副専攻長 長谷川 義治

の連携をはじめとして、その取組がとても充実しているとの御講評をいただきました。

心配なことがないわけではありません。2期生の募集について、スクールリーダー養成コースに比べ、教職専門性開発コースの方が、やや心配な状況です。学部学生に対するPR不足もあるようですが、学生気質が変化してきていることも一因しているように思います。「2年目のジंकス」とならないよう、学部学生に対するPRを強化するとともに、1期生の「出口」の準備も意識していく必要があると感じています。

私は、時々、10年後・20年後の教職大学院の姿を夢んでいます。教職大学院修了生は、管理職として学校経営でリーダーシップを発揮したり、若手教員として同僚と協働しながら校内研究で中心的役割を担ったりしています。そして、学部学生の中には、教員採用試験の内定を受けながらも「特別選抜」を希望して教職大学院に進学する者が続出しています。そのためには、足元を固めつつ着実な歩みを進めていくことが重要と思っています。

内 容

- 10年後を夢見て (1)
- 研究発表会を振り返って (2)
- 拠点校だより (8)
- スタッフ紹介 (10)
- 院生の自己紹介 (11)
- 夏期集中の振り返り (14)
- 拠点校の教育研究会 (第2次案内) (16)

研究発表会を振り返って

教職大学院の各拠点校では今秋、公開授業（研究集会）が開かれ、スクールリーダー養成コースの院生や教職専門性開発コースの院生が積極的に参加しました。日々の授業をとらえ返し、子どもたちの思いや気付きから授業を組み立てることの大切さ。教師の思いも大事にしながら、それが一方通行ではなく子どもたちとの双方向で授業が組み立てられることの重要性。“授業が変われば学校が変わる” 全国の学校でも今までの授業の在り方を根本から問い直しています。

公開研究会の意味

牧田 秀昭（福井市至民中学校・研究主任／教職大学院客員准教授）

第1回公開研究会。授業、新校舎の造りや利用法、地域との連携等を通じて、これからの中学校教育の在り方を県内外に広くアピールできたことの意味は大きい。公開研究会は前々から予定していたが、これだけのことが1年目からできるとは正直、想定外であった。提案内容の斬新さもさることながら、500名規模の参観者を受け入れる研究会は県内公立中では過去に例を見ない。改善点ばかりが目につくが、研究主任として、やり遂げたことの満足感はいままで最高である。いろんな要素があったが、中でも最も心を打ったのは全教職員の前向きな姿勢であった。当たり前のように実は最も難しい。この熱意は生徒たちにも保護者にもいづれ必ず伝わっていくであろう。山下校長をはじめ

めとする今のスタッフの一員であったことを誇りに思う。公開し続けることでこの熱意は継承されるであろう。我々教職員にとって一生忘れられない「第1回」目となった。



学びと生活の融合ー異学年型教科センター方式を運営するー10/24

スクールリーダー養成コース 大橋 巖（福井市至民中学校）

10月24日（金）に、新至民中学校での第1回公開研究会が盛大に開催されました。県内外の教職員や大学関係者、地域の方々を含め500名余りの参加者がありました。午前中には学校ボランティアガイドの皆さんによる学校見学会も開催され、熱心な解説ぶりに参加された多くの方々も感心されていました。午後からは、数学・理科・英語・技術・美術の授業が公開され、子どもたちの学び合う姿を見ていただきました。新校舎の豊かな環境を存分に活用した授業が展開され、多くの先生方は子どもたちが創り出す授業を熱心に参観されていました。また、授業だけでなく、受付・案内・接待なども生徒自らが教職員と一緒に

なって取り組み、「おもてなしの心」を発揮してくれました。

全体会では、まず始めに生徒を代表してイエロークラスター長の竹田悟君があいさつをしました。クラスター制の良さや教科センター方式によって今まで以上に授業に主体的に臨むようになったことなどを堂々と発表してくれました。牧田秀昭教諭による研究経過報告の後、渡辺本爾氏（福井市教育長）、松木健一氏（福井大学教授）と本校校長による鼎談が行われました。『新至民中で21世紀の中学校教育をデザインする』という鼎談の中では、「受験、部活、生徒指導で成り立つこれまでの中学校教育は子ども

を指示と規制で育てるだけ。一方向のコミュニケーションしかない」という中学校教育の抱える問題点が指摘されました。その克服に向けた本校の取組である異学年型教科センター方式、クラスター制、地域交流活動の意義が議論されました。最後には、公開した授業の分科会も行われ、参加された先生方から本校の授業について多くの示唆をいただきました。

本校では、授業改革の一環として3年前から70分授業を導入しました。これは、「問題解決型学習」を推進するためのものであり、授業の質を転換しようとする本校教員の強い決意の表れでもあります。さて、実際に70分授業を参観された方々から「協働で学ぶ姿が身に付いていると感じた。考えを自由に話し、みんなで練り上げていく授業、これによって子どもたちの思考力が育つと実感できた。」



「個と集団の関係で、個の発見を集団の発見へと、集団の発見を個の発見へと返していく時間も70分あれば取れる。」、「生徒たちが徐々にコミュニケーションを深めながら学びに熱中し、課題を解明していく姿に立ち会うことができた。このような学びの姿こそがこれからの生徒たちの力になると思う。」、「生徒たちがグループ活動の中で協働しようとする姿が見られて、70分の有効な使われ方を感じることができた。黒板、可動壁、ホワイトボードなどの道具の利用も協働に効果的であった。」という賞賛の声を多数いただきました。一方、「班の構成についての工夫やお

互いの人間関係についてはどうなのかなと思ひ、そこにまだ少し考える余地があるのかと思った。」、「70分という長い時間の追究は、45分の授業を行ってきた1年生にとっては、集中できる時間を超えているのではと思った。1, 2, 3年という段階を踏んではどうかと思う。」、「オープンスペースの利用や教科センター方式の良さや授業の関係についても知りたい。それは個々の学びにどのように影響しているのか。」など、貴重な御意見もいただくことができました。

また、本校がこれからの新しい中学校の運営システムとして提起した「異学年クラスター制」については、次のような感想をいただきました。「クラスター制のイメージがよく分からなかったのですが、全体会でのお話を伺って、簡単に言うと『ハリーポッター』の登場人物たちが通う Hogwarts魔法学校のような感じなのだろうと理解しました。今年度から新校舎に移られたということで、普通の学校から見れば本当に夢のような学習環境ですが、ハリーたちが様々な困難を乗り越え成長していくように、貴校の生徒がどのような変容を遂げていくのか、これからの物語の続きが楽しみになりました。」

さらには、本校が取り組んできた「教師の協働研究・力量形成」の在り方については、「生徒の学びの姿から授業の意義を探るための研究会がここではできる。それが教師が変わる第一歩だと改めて思った。」、「グループごとの展開という理科分科会の持ち方も大変良い。参観者もまた学び合うコミュニティという感じがした。」といった御意見もいただきました。

「至民中から全国に“本当の教育”というものを発信し続け、日本の教育システムを見直す原動力となっただけでいい。」という熱いメッセージをいただくこともでき、本校がこれまで移転開校に向けて取り組んできた、授業改革をはじめとする様々な取組を全国に向けて大いに発信できた一日となりました。

ボランティアガイドによる学校見学会 —地域開放型学校づくりを支える新しい連携へ— スクールリーダー養成コース 高村 祐司（福井市至民中学校）

新至民中学校での第1回の公開研究会が10月24日(金)に開催されました。4月、「異学年教科センター方式」と

して開校した本校がこれまで進めてきた経過を広く発信し、同時に多くの貴重な御意見や御示唆をいただく貴重な

日となりました。また、本校の取組の3つの柱である生活基盤としての「異学年クラスター」、学びの場としての「教科センター」、そして社会とのかかわりとしての「地域連携」についても、これらの意義を中心に、全体会の中での渡辺本爾氏（福井市教育長）、松木健一氏（福井大学教授）と本校校長による鼎談を通して、議論されました。

さて、今年度、本校では、地域連携の一環として「学校ボランティアガイド」という組織が立ち上がっています。研究会当日の午前中にも、この学校ボランティアガイドの皆さんにより学校見学会が実施されました。そこで、ここでは、この学校ボランティアガイドについて少し紹介したいと思います。



「見学に訪れた方を教職員が案内するのではなく、地域の人に案内していただく。」「自分たちの地域の学校を地域の方々自身が語る。」そんな発想から生まれたのが学校ボランティアガイドです。本校の同窓生を中心に、現在11名の方々にこのガイドとして協力をいただいています。本校は、この4月に全国にも例を見ない新しいシステムの中でスタートを切り、校舎の構造自体も建築学の専門誌に取

り上げられるほど注目されています。4月からの半年余りの間にも、県内外から学校訪問・見学の依頼が多く寄せられています。また、それらは、学校関係だけでなく行政や建築関係者など多岐にわたっています。こうした中、活躍いただいているのが、この学校ボランティアガイドです。

研究会当日の見学会では、50名ほどの方からの見学希望が寄せられました。熱心な解説に、参加された方も感心されていたようです。「地域の人がガイドしているということに驚いた。迷いやすい変わった造りの校舎なので、こうして案内してもらえて大変ありがたい。」というような声もいただきました。

さて、学校ボランティアガイドですが、来校者への実際の対応だけでなく、ほぼ1週間に一度のペースで学習会を開いています。これは、本ガイドが単に本校の施設等ハード面を解説するのが目的ではなく、その折々の学校の取組や生徒の活動の様子も含めて本校を伝えていこう、という願いがあるからです。毎週金曜日の午後になると、しみんステーション(地域連携推進室)に集います。時には学校から子どもたちの様子をお伝えしたり、時にはメンバーのそれぞれから新しい情報が提供されたりといったように、ガイド相互の協働によりお互いが幅広い知識を共有するまでになってきています。

教職員は、異動があつて、いつかは入れ替わっていきます。時がたつにつれ、移転開校当時の思いが徐々に忘れ去られていくことも予想されます。しかし、このボランティアガイドの方々により、この学校に託された熱い思いが脈々と受け継がれ、語られていくことを期待したいと考えています。

自主研究発表会を振り返って

スクールリーダー養成コース 宇野 泰裕（福井市豊小学校）

校舎後方の八幡山が紅葉に輝く11月6日（木）、本校の自主研究発表会が開催された。今年度、新たな研究主題を「共に学び合い、暮らしに生かす子どもたち ～見通しをもち、暮らしに活用できる子をめざして～」と設定し、その成果を公開した。主題設定の理由として、子どもたちの

学びを「個としての知識」から「集団への知恵へ」と高めることで、子どもたちの主体的な生き方を目指したいとの願いがある。初年度の研究の柱として「見通しをもちくらしにつながる単元構想」「表現力を高める言語活動の充実」「主体的学習のための交流の場」の3つを重点化し、今回

は低・中・高学年で3つの提案授業を公開し、分科会形式で研究協議を進めた。



高学年部会では、6年社会「長く続いた戦争と人々の生活」の授業が公開された。戦争体験者から聞いた福井空襲の話から「どうして日本は戦争を始めてしまったのか？」という疑問を単元を貫く課題として、主題探究型の学習を

進めてきた。本時は、アメリカの原爆投下のねらいを予想する中で出された「日本を降参させるため」という発言を受けて、学習課題「原爆投下がなかったならば日本は戦争は続けていたのか」について討論的話し合いが展開された。子どもたちは「続いた」、「終わった」の立場で座席移動の後、既習の知識をもとに相手を納得させるような話し方で、自分の考えを述べ合い、考えを深めていった。相互指名で、教師の板書が追いつかないほど発言が繰り出される授業展開は、それだけで子どもたちが主体的に学び合う姿を象徴するものであった。研究協議では、子どもたちの自由な発言の中に、戦争や平和に対する思いや当時の日本を現在と比較しながら分析する力を見取った参加者の発言があった。また、正しい歴史観をはぐくむための社会科授業の在り方についても意見が出され、熱心な協議が行われた。

研究発表会を振り返って

スクールリーダー養成コース 笠川 誠二（福井市豊小学校）

今年度の自主研究発表会では、私には3つの役割があった。そのことを感想を交えながら振り返ってみたいと思う。

まず1つ目。7月の「授業づくり研究会」で道徳の授業を行い、本年度の授業の方向性、研究会の持ち方、授業記録の取り方等について検討する提案授業を行った。その反省等を踏まえ、自主研究発表会の授業の学習過程を組んでいる。2つ目は、中学年部会の一員としての役割。授業研究会は石井恭子先生をお迎えした2回を含め、計6回行われた。中でも、自主研究発表会を間近に控えた他クラスでの事前授業後の研究会では大変熱のこもった話し合いが行われ、児童の学びの様子を分析し、より効果的な学習法を探った。自主研究発表会での研究会の詳細は本年度の研究紀要に委ねるが、2回の事前授業と当日の授業とを比較して思うことは、授業は生き物、クラスが違えば児童の反応も違うということだ。授業者が学習者の思いをしっかり受け止めて授業を行っていたことの証であろう。3つ目は、プレゼンテーションのスライド作り。10分程度の説明



で何をどのように提示すれば、本校の研究概要を参観者の方々に理解していただけるか、大変頭を悩ませた。しかし、教職大学院で学んだことを生かし、具体的な事例を盛り込むことで、思いは達成できたと思う。

このように、今回の自主研究発表会を通して。本校や他校の先生方の多様な考えや授業にかける熱心な姿勢に触れられたことは、私にとって大変意義深いものとなったと感じている。

インターンの立場から豊小学校の研究を見る 教職専門性開発コース 田村 晃紀（福井市豊小学校インターン）

先日、インターン先である福井市豊小学校で自主研究発表会が開かれた。自主研究の主題は「共に学び合い、くらしに生かす子どもたち」である。研究発表会当日の印象は、いつもの豊小の授業が行われている、というものであり、普段の学習が生かされているように感じた。主題に「共に学び合い」という言葉があるが、豊小では児童同士の考えや意見のつながりが大事にされている。学級内での個々の児童の考えや発言を尊重し、特異な意見であっても、賛成であっても反対であっても、言いたいことを言える雰囲気を作る工夫が多くなされている。その一つが、児童の発言を板書する際には、その発言者の名前も添えることである。この手立てによって、発言者が大切にされていることが児童に伝わっている。さらに、その黒板を見ることで児童たちは「～さんの意見に付け足して、…だと思ふ」などといった発言がしやすくなり、思考を共有しつなぐことが

できるのである。

学校での学びを「くらしに生かす」こと、これも豊小の研究主題の大きな柱である。これは今年度から本格的に進められている主題である。私は個人的にはこれを、くらしの質を学び的なものに変えていくこととしてとらえ、3学年の社会科授業実践を行った。その中で、児童らの実生活を変えていけるものを何か残したいと考え、教室に『産地マップ』を掲示させてもらっている。これは、買い物先で何かの産地が分かったら随時その全国マップに品物のシールをはらせていくといったものである。これによって少数であっても児童の中に消費者意識や地理的な理解や関心が高まることを期待している。教室での意欲や関心、技能を生活においてまで持たせることに難しさはあるが、児童の世界を深めたり広げたりするためには確かに必要なことであると感じている。

自主研究発表会を終えて スクールリーダー養成コース 鈴木 秀卓（丸岡南中学校）

丸岡南中学校は開校3年目を迎え、3年間を一区くりにした研究の最終年度を迎えた。3年次の本年度は、当初の研究主題「教えやすい環境から学びやすい環境へ」から「学びやすい環境の創造～喜びが感じられる授業をめざして～」と、内容を絞り込んでスタートさせた。

昨年度末から、研究主題の「環境」と「喜び」について、全教員でじっくり話し合ってきたので、研究主題に対し、十分な共通理解ができた。全教員が一つになり、同じ方向に向かって取り組むことができたと考えている。

4月からは「授業づくり」を中心に研究を進め、自主研究発表会では、英語科・数学科・理科の授業を公開し、それぞれの教科について授業研究会を開催した。

どの分科会も20名以上の参加者があり、坂井地区指導主事の先生方のほか、福井大学教職大学院の先生方にも、2名ずつ助言者として入っていただいた。

特に、理科では、本校の授業研究会スタイルである小分科会形式をとり、分科会を4つに分け、大変盛り上がった研究会となっていた。



各分科会とも、多くの先生方や大学院の学生の皆さんから身に余るお言葉や御指摘をいただき、今後の研究に役立つとも有意義な会となった。

参観していただいた方々に対して、アンケートを依頼したところ、回収率が高く、大変感謝している。

「授業は規律があり、落ち着いていたか」、「教師の教え方に熱意を感じたか」の質問に対しては、「あてはまる」が、それぞれ97%、91%に達する高い評価をいただいた。

今回の発表会を終え、改めてすばらしい生徒に恵まれて

いること、教師が一つになり、また、生徒と教師とが一体となって学び合っている姿を確認することができた。

研究発表することは、自分たちの実践を振り返ることで

あり、大変意義深いものである。今回の発表会を通して、得たことを今後の糧とし、全教員が力を合わせて邁進していく所存である。

自主研究発表会に参加して 他校のインターンの立場から丸岡南中学校の研究を見る 教職専門性開発コース 山口 敦央（福井大学教育地域科学部附属中学校インターン）

私にとって今回が初めての丸岡南中学校訪問だった。印象的だったのは、やはり「環境」と「生徒」である。大きな校舎は直線を基調としており、素材の色をそのまま残したゆとりのある空間が多く見られ、同じ教科センター方式を取り入れている至民中学校とはまた違う空間であると感じた。そして、生徒の様子には驚いた。通りかかるほとんどの生徒が自らあいさつをし、後ろからでも声を掛けてきた。また、授業参観と研究会の合間の清掃では、どの場所においても一言もしゃべらずに校舎を磨く生徒たちの姿があった。私は今までにこのような光景を見たことがなかったので、とても衝撃的であり、すばらしい学校文化の一面を見ることができたと感じた。

授業参観では、1年生の数学の授業を参観させていただいた。方程式の利用の導入で、ビンの中いっぱいに入れら

れた十円玉の枚数を、班ごとに重さを実測するなどして求める授業だった。研究会では様々な意見が交わされたが、私がその中で感じたことは、生徒が小数点以下まで考えて出してきた答えを使わずに、最後に教師から数字を与えて方程式を解いたことがもったいなかったのではないかと。私が授業作りで大切にしたいことは、遠回りでもいいから生徒の意見を大切にすることである。これはインターンや他校の研究会、様々な先生方と話す中で確立されてきたものだ。今回の授業参観でそれを感じ、数学的活動のおもしろさと、それをまとめていく難しさを改めて学ぶことができた。このことをこれからの自分の実践に生かしていきたい。そして、丸岡南中学校の授業作りに重点を置いた研究がこれからどのように変わっていくかが楽しみだ。



拠点校だより

アメリカの特別支援教育・感想

福井大学教育地域科学部
附属特別支援学校
教諭 政井英昭

10月22日からの16日間、日本教育大学協会主催の教職員海外派遣事業「B団」に参加させてもらうことができ、アメリカの学校事情を視察することができた。訪問先はすべて、特別支援教育に関する所で、団の研修テーマも「アメリカの幼・小・中・高における特別な教育支援を要する幼児・児童生徒への取り組みについて」である。

視察を通して、IEP（個別の教育計画）の考え方や使い方の違いや、スキナーの行動理論を下にする自閉症を専門とする私立学校の取組、日本とも関係が有る Abilities! という肢体不自由の私立学校、Hadley という世界最大の通信による視覚障害の学校のことなど書きたいことは山ほどあるが、それらは別の機会にするとして、今回は全行程を通じて感じた、インクルージョンに関することを書こうと思う。



制度としてのインクルージョン教育が進んでいるという印象である。アメリカでは30～40年前に、ADA（アメリカ障害者法）という法律が施行されて以来、障害を持った子どもも地域の学校へ通うこと（つまりインクルージョン）が前提になっており、どうしても地域の学校に通えない場合は、オータナティブスクール（選択学校）に通うことになっているということである。そのオータナティブスクールの数や通学者数もADA施行によりかなり減ったのだということであった。さらに、オータナティブスクールに通う場合の方法も地域の学校がスクールバスを手配するなど、地域に住んでいるといった発想が徹底しているようであった。知的障害を併せ持たない聴覚障害の生徒だけを集めている私立学校にも視察したが、そこは保護者がその学校を希望して入学させているので、インクルージョンには反していることにはならない。

一方、公立の中学校では、普通学級にも支援の必要な自閉症らしい生徒もいて、アシスタントティーチャーがそれとなく支援に入っていたし、情緒障害児だけを集めての英語の授業もあり、普通学級では対応しにくい生徒たちが一緒に活動する教室も見したが、立位の取れない生徒も在籍していた。そういった生徒も、ランチの時間などは普通学級の生徒と一緒に食事をしているようであった。その公立中学校で、情緒障害で転入してきた生徒でいろいろなトラブルが続いたため、IEPチーム（臨床心理士など外部専門家を含む）で対応を検討し、オータナティブスクールに転校を勧め、現在はそこで安定した学校生活を送っているという事例も聞くことができた。そういったオータナティブスクールが本邦の「特別支援学校」に当たると思ったのだが、知的面の障害児を担当するオータナティブスクールを視察することができず、残念であった。ただし、視覚障害児を担当とする私立のオータナティブスクールといえる学校は視察することができた。その中で、3歳から5歳を対象とするプレスクール（幼稚部に当たる）では、その地域に住む障害のない幼児もクラスと一緒に活動していたが、6歳以上のロウアースクールや更にその上の

アッパースクールでは、知的に障害を併せ持つ視覚障害児だけを対象にしている、現場での実習を多く取り入れているコースなど、能力に応じたコースをいくつか持つカリキュラムを組んでいた。知的に障害のない視覚障害児は地域の学校に通学しているということであった。

インクルージョンが進むということは、障害を持つ生徒が、地域に存在するという面で非常に有効であるし、もし、その学校で過ごしにくいならば、他の選択肢があるというのはいい制度である。しかし、公立学校の普通学級で数学の授業中に分配法則などを学習している生徒の中に、明らかに付いて行っていない自閉症と思われる生徒がいて、グループ活動中、アシスタントティーチャーもそばにはいたが、数字のカードをただ思いついたように並べているだけという様子を見かけたが、それでは学習にはならないのではと感じた。インクルーシブな制度はあっても、インクルーシブな教育を行うことは難しいと改めて実感した。

日本では「障害者の権利に関する条約」を署名はしたが、締結できないでいるが、このインクルージョン教育がネックになっているとも聞いている。就学の仕組みをどのようにしていくのかは私たち教師自身の問題でもあることを改めて感じた。

各教育大学附属特別支援学校の先生方が12人中10人で、旅を通じて全国の先生方とのネットワークが持てたのは、大きな財産であった。お互いの学校の研究会の参加や情報交換がこれからも持てるのは幸いなことである。



レセプションの一コマ

Staff 紹介⑥

柳澤 昌一 やなぎさわ しょういち

社会教育研究を志して30年になりますが、”社会教育とは”，“社会教育研究とは何か”と問われるといまだに説明に窮してしまいます。それは領域や実体というより、まず理念であり、これから実現していくべきものであり、そこに向けてのプロセスにほかならないからでもあります。

1949年、社会教育法の制定時における提案理由の説明の中で、当時の高瀬文部大臣は、社会教育とは「国民相互の間において行われる自主的な自己教育」であると述べています。1)自己教育、そして相互教育の広汎な実現が、戦後社会教育の基本的な理念・課題として位置付けられることとなります。戦後の社会教育研究を方向付けた論文群の中で宮原誠一は民主主義とのかかわりの中で、社会教育を「自由な思考と独立の判断」を伴った学習活動を「あらゆる階層のすべての人々」のものとする営みとしてとらえています。2)自己教育と相互教育、自由な志向と独立の判断を培う学習をどう実現していくのか、その学習過程への問いが社会教育研究の中軸に位置付けられることとなります。1920年代、普通選挙運動の展開の中で自己教育の理念を掲げ地域に働く青年たちが創出した信濃自由大学、1970年代の東京都中野区のPTAの活動、国立市公民館保育室運営会議を基盤とする女性問題学習、長野県松川町の健康問題学習の展開と組織。地域において展開される自己教育への企図、そこでの学習・実践のプロセスを跡付け、それを支える編成を探る。そうした社会教育実践研究を学部・大学院を通じて協働して進めてきました。3)

福井大学に来てから、教師を目指す若い世代の協働研究にかかわりながら、学校教育における授業研究・実践研究に目を開かされることとなります。とりわけ、伊那小学校・堀川小学校の実践とそこでの協働研究の視点・方法・編成は、これまで社会教育実践研究において進めてきたことと共通点も多く、また、そこにはない展開と構成もあって大きな刺激となりました。福井の公民館を担う皆さんとの協働研究、子育ての拠点としての共同保育にかかわる実

践、大学の同僚とともにかかわってきた附属学校の諸先生との協働研究も並行して、またそれぞれの実践経験と研究を生かす形で展開して行きます。実践と研究を通して検討されたことを、実際の協働プロジェクトの構想と展開に生かし、その展開の省察を通して実践研究の妥当性を検討するとともに、そこで初めて明らかになってきたことを表現し共有していく。さらに、プロジェクトの展開によって生じてくる新しい段階での課題や壁に即して、改めて調査を組織的に進め、新しい試行を進めていく。そうした実践と実践研究の積み重ねを続けてきました。学習過程研究という共同のゼミ、探求ネットワーク、大学院学校改革実践研究コースをはじめとする取組はそうした協働の実践と研究の展開であり軌跡でもあります。4)



4月に出発した教職大学院。春以後の展開、そして秋の拠点校での公開授業研究会を通して、実践の場での実践者自身による実践と省察の展開、そしてそのコミュニティを長期にわたって支えようとするこの新しい大学院が、その役割を果たしつつあることを実感しています。同時に、この新しいプロセスと編成により確かな基盤を築くとともに、それを更に広く共有していくという、次の、より困難な課題に迫られてきていることも痛感しています。協働研究を通して、この課題に挑戦してきたいと思っています。

- 1)1949年5月7日の参議院文部委員会、同14日の衆議院の同委員会における高瀬荘太郎文部大臣の社会教育法案の提案理由説明。「自己教育」概念の歴史的な背景については大槻宏樹編『自己教育論の系譜と構造』、社会教育基礎理論研究会編『自己教育の思想史』雄松堂、1987、柳澤昌一「自己教育・成人性・批判的公共性」(大槻宏樹研究室編『社会教育の杜』成文堂、2003)を参照してください。
- 2)1949年から50年にかけて一連の論稿・著作において宮原誠一は社会教育の本質と課題を提起する。『宮原誠一教育論集』第二巻(1977)に「社会教育の本質」として再構成されている。宮原誠一「社会教育の本質」前掲、pp.35-38。
- 3)その多くは社会教育基礎理論研究会編『叢書生涯学習』全10巻(1987-1992 雄松堂刊)に収録されています。
- 4)二冊の報告書『学習過程への問い』『実践コミュニティと省察的機構』に、こうした福井大学における学習過程研究の軌跡がほぼ網羅されています。

院生 紹介⑤

「院生の自己紹介は今回の号で全員終了です。今までの自己紹介で、スクールリーダー養成コース及び教職専門性開発コースの院生がそれぞれの熱い思いで実践や研究に取り組んでいることが伝わってきます。教職大学院の第1期生として、今後のますますの活躍に期待したいと思います。」

笠川 誠二 かさかわ せいじ

(福井市豊小学校)



私が教員になって 20 年以上が経ちます。この間にたくさんの方の出会いがありました。担任した子どもたちは 300 人を超え、そのほとんどの卒業に立ち会ってきました。もちろんもっと多い方もいらっしゃるのですが、改めて振り返ってみると自分でも大変な数字だなあと感じます。

その中でも忘れられない出会いの一つが、友達とのトラブルが多く、時々授業中に大声を出したり、教室を抜け出したりしようとしていた子との出会いです。その子を前にした当初、不勉強な私にはどうしたらよいか分からず頭を悩ませる毎日でした。もちろん一番困っていたのはその子自身だったので、そのころの私には、そう思いやる心の余裕など無かったように思います。同僚の先生やスクールカウンセラーの先生に相談したり、本屋に通ったりして手立てを探りながら、どうにか過ごす毎日でしたから。ここでは詳しいことは割愛しますが、1 年という短い

間でしたが悪戦苦闘しながらも、その子やその子を取り巻く学級の子どもの成長の様子を間近で見ることができました。この時、特別支援教育の重要性やすばらしさを感じるとともに、もっと深く特別支援教育を学びたくなったのです。このことが、私に教職大学院で学ぶことを決意させた動機となりました。

学級の中で困り感を様々な形で訴える子を前に、支援の在り方に悩む教師は多いのではないのでしょうか。私は研究テーマを「通常学級における支援を必要とする児童とその学級における効果的な指導及び必要な支援の在り方」とし、同じ悩みを持つ様々な教師に同じ悩みを共有するものとして、気付いたときからすぐにながしかの支援に取り組んでいけるヒントになるものを作りたいと思っています。

この 4 月、教職大学院に入学とともに異動。当初の研究テーマを大きく変えなければならないのか…という、あせりと不安があったのは事実です。しかし、そんな中でも新たな出会いがありました。優しく情熱的な勤務校の先生方はとても頼りになりますし、教職大学院では、大学の先生方は高い志を持つ同年代の先生方や若い先生。そんな方々との学びは今までにない多様な考えに触れることができ、様々な面で勉強になるだけでなく、大きな刺激も得ることができています。

教職大学院での勉強も後半です。締めくくりに向けてラストスパートで頑張っていきたいと思っています。

林 幸恵 はやし ゆきえ

(福井大学教育地域科学部附属幼稚園)



福井大学教育地域科学部附属幼稚園の林幸恵です。附属幼稚園勤務4年目となります。まさか自分が幼稚園に勤務するなんてととまどいを隠せなかったころから、もう4年が過ぎたのかと改めて感じている今日このごろです。先日、ある研究会に参加し、幼小の交流授業を参観しました。「この子は昨日どんな遊びをして今日の遊びにつながっているのだろう。」「今この子は、こんなことを感じこんなことを考えたから、この行為をしているのではないか。」と、幼児の表情、つぶやきから一人一人の幼児の姿を見取る幼稚園教諭の目で参観している自分に気付き、これが教育の根底であり原点であるという言葉の思い出しました。4年間で自分の中で積み上げてきたものを感じるよい機会となった研究会でした。

自分の教員生活を振り返ると、新採用で小浜市立雲浜小学校の理科教育からスタートし、福井市松本小学校では特殊学級を経験し、また、同校で、造形教育や社会科教育を研究する機会にも恵まれました。福井市東郷小学校では、

幼小連携教育に携わる機会があり、それぞれの勤務校で貴重な経験を積ませていただきました。その経験があったからこそ、現在の幼児教育に携わることができたのではないかと考えています。そして、この4年間で、「個々の子ども」を見る目を勉強させていただいたと思っています。校種が違って子どもを見る目は同じであり、一人一人の子どもを大切にするとどのようなものかを身をもって経験することができたと思います。

本年度は、幼稚園の研究主任として、「伝えあう ひびきあう」という研究テーマで、幼児の育ちを支える環境構成や援助について研究を進めています。「日々のエピソードから子どもの育ちを見つめ、エピソードからの学びを子どもに返し、その子の自信につなげ次のステップにする」ということを考えながら、日々実践しています。紆余曲折の研究ですが、子どもに返せる研究となるように、また、自分自身を磨く研究となるように、頑張っているところで

す。教職大学院に入学してあっという間に8か月が過ぎようとしています。教職大学院で出会った大学院の先生方、また、各コースの皆さんから、毎回たくさんの刺激や情報をいただくことができ、幼稚園の研究や自分磨きに大いに役立っていることに、感謝しております。1年は、あっという間に過ぎていこうとしています。この1年が実り多き1年になるであろうことを実感しています。今からは、長期実践報告作りに追われる日々になりそうですが、残り数か月の大学院生活を大切に過ごしていきたいと思っています。

永宮 智美 ながみや さとみ

(福井県立福井東養護学校)

県立福井東養護学校の永宮智美です。今年度で講師5年目となり、この福井東養護学校での勤務も3年目に突入しました。残りの2年は、附属小学校で4年生の副担任、科学技術高等学校で理科と家庭科の実習助手としてお世話になりました。小学校は小学校、高等学校は高等学校、特別支援学校は特別支援学校のおもしろさや大変さがあり、どの学校で勤務していても、そこで学ぶ子供たちやそこで働く先生方と向き合う中で、いっぱい笑って、いっぱい悩んで、教員としても人としても多くのことを学ばせていただいています。

専門は“障害児教育”です。それは私がまだ高校1年生だった時のことです。『星の金貨』というドラマの中で、俳優さんたちが繰り広げる手話を見たミーハーな私は、これだ！とひらめき、すぐさま「聾学校の先生になる！」と思いついたのです。今振り返ると、すごく短絡的な考えだったなあと思うのですが、その日から、“障害を持った子供たちの先生になる”という夢が始まりました。あれから13年、特別支援学校という場所で子供たちと共に毎日をごさせていることを考えると、あの時の自分の直感を信じて良かったとしみじみ感じています。

実は、教職大学院に入ろうと思ったのも、直感でした。教職大学院が立ち上がるらしいという噂を耳にしたとき、高校生の時と同様に、これだ！とひらめいたのです。いざ試験を受けてみると、目が点になるような難しさで頭がショート寸前…。しかし、直感力が奇跡を呼び起こしたのか無事合格し、4月から晴れて大学院生になることができました。が！“花の大学院生”の甘いイメージに浸るのも束の間、こんなにも自分に向き合わされるとは想像もしていませんでした。そして、自分の悩みに向き合い、言語化することがこんなにも苦しいものだとも…。(涙)

私は4月から小学校5年生の女の子の担任をしています。毎日、ほぼマンツーマンで活動しているので、彼女が喜んだり、怒ったり、笑ったり、泣いたりして伝えてくる



思いを常に一番そばで受け止めることになります。特に、怒ったり泣いたりするときは、“何に対して”彼女がその気持ちを持ったのか、“どうしたら”その不満や不安を少なくしてあげることができるのだろうか、などといった様々なことを考えます。しかし、その答えはすぐに出ることもあれば、どれだけ考えてもグルグルグルグル同じ所を回って見いだせないときもあります。きっとこれまでも、今と同じような思いの繰り返しの中で子供たちと向き合ってきたと思いますが、大学院生になった今、自分の中に渦巻く悩みや葛藤を言葉で伝え、文字として表すことで、それらととことんにらめっこする必要がこれまで以上にあり、この行為が非常に私を苦しめます。しかし、「産みの苦しみ」という言葉があるように、この高い壁を登ることで、きっと一つ大きな自分へとパワーアップできるのではないかと信じています。そして、その大きくなった私で、大好きな子供たちに今以上に寄り添えるようになることも。

ということで、苦しみを前にもだえている私を見たら、どうぞ声をかけてください！そして、先生方の元気パワーを注入してください！！まだまだ未熟者の私ですが、2年間どうぞよろしく願いいたします。

夏の集中サイクルを終えて

教職開発専攻教員 森 透

夏の集中サイクルは3つのテーマで3日間ずつ開催された。第1のテーマは「実践記録・実践研究を読む」で、全国の附属学校や公立学校の実践記録（紀要・報告書等）から自分の関心のある学校の実践を1～2点選択し、その実践をレポートにまとめること、第2のテーマは「実践の架橋理論の検討」で、実践と理論をつなげる架橋理論の文献をリストから1点選びレポートにすること、第3のテーマは「実践研究の方法と組織」で、第1と第2のテーマを踏まえて自分自身の4月からの実践を省察しまとめること、の3つであった。この第3のテーマは集中サイクルで最も中核の内容である。スクールリーダー養成コースと臨任の院生は4月からの自身の実践を、今までのラウンドやカンファレンスで記録化し報告してきたものを踏まえて練り上げ再構成するという課題であった。その課題の中で、子どもたちの学びのプロセスを丁寧に跡付けてレポートにまとめた。このレポートが長期実践報告の土台となるものである。他方、ストレートマスターはインターンに入っている拠点校での実践を省察し、特に、6～7月に担当した自身の授業省察のレポートをまとめた。

集中のやり方は、3つのサイクルとも院生が自身の課題に基づいてまとめたレポートを最初のグループで報告し、3日目には、最終の練り上げ再構成したレポートはクロスセッションで違うグループのメンバーに報告するという進め方であった。また、多忙な中で参加する院生が3日間の中でそれぞれの課題をレポートにまとめることのできる時間を可能な限り確保した。院生がそれぞれの課題を遂行する時間の確保が、この集中サイクルでは絶対条件であ



る。参加した院生は、学校現場から離れた環境で協働研究の仲間として集中して文献を読み、自身の実践をまとめることができたことで、多忙な日常とは異なる次元、研究的な体験ができたのではないかとと思われる。

私がグループで出会った院生の一人は、4月からの職場での協働研究の胎動を熱く語ってくれた。中学校の現場でお互いに授業を見合うという習慣がない中で、自由に気軽に授業を公開し、子どもの姿で語り合うという経験が職場の先生方には新鮮であったこと、そして、授業を変えることで子どもたちの表情も変わっていくこと、さらに、教師集団も活性化してくることを報告された。普通の公立中学校が少しずつ変わっていくこと、そのリーダー的な役割をこのコースの院生が担っていることはうれしい限りであった。

また、この集中サイクルでは教職大学院のスタッフが短い時間であったが、自分の専門を紹介するコーナーを設けた。その中で、客員教授である玉木洋氏（福井キャノン事務機（株）社長）と松田泰俊氏（前長野県教育委員長）は人生の大先輩として、今の教師に求められるものを熱く語り、院生への問題提起を行った。

以上、夏の暑い時期の集中サイクルであったが、内容と方法が大変充実したものとなったと考えている。この夏のサイクルを踏まえて、特に、スクールリーダー養成コースの院生には今後の長期実践報告づくりにつなげていただきたいと思います。



共同研究の紹介

—教師教育における大学院の役割について

教職開発専攻教員 森 透

筆者は他大学のメンバーと科研の共同研究「教員養成系大学院の制度とその教育実態に関する総合的研究」に参加して今年度が3年目の最終年度である。9月14日に東京の工学院大学で開催された日本教師教育学会で共同発表した。そのときに、全363頁にも及ぶ報告書『教員養成系大学院の制度と教育実態—基本資料と解説—』（代表・和井田清司武蔵大学教授）を分科会の参加者に配布した。内容は、戦後日本の教育系大学院の果たしてきた積極的な役割を再評価し、この4月に発足した教職大学院についても歴史的経緯も踏まえて検証するというスタンスである。報告書には日本だけではなく、アメリカ・イギリス・中国・韓国・台湾の事例が紹介されている。筆者の分担は、「一般国立大学～福井大学の事例」であり、報告要旨は以下のとおりである。

「報告者は一般国立大学の大学院を対象に調査・研究しているが、昨年の発表では日本教育大学協会加盟の国立大学の大学院調査を踏まえて全体的な動向を報告した。今回の報告では報告者の所属する福井大学の事例を取り上げ、福井大学大学院教育学研究科の成立と展開を報告する。この大学院の展開の経緯を踏まえて、この4月に教職大学院が発足したことについても報告する。地方の一国立大学である福井大学は1992(平成4)年4月に教育学研究科修士課程を設置したが、その後、教師教育を巡る様々な議論や文部省の「在り方懇」などの問題提起などを受けて、福井大学では3つの教授会見解(資料1)を社会にアピールして、地域の学校に根ざした大学と学校との協働研究のシステムを提起した。特に、教授会の第三見解(2002年3月15日)では、「21世紀における日本の教師教育改革のデザイン—地域の教育改革を支えるネットワークと協働のセンタ

—」と題して、地域の学校を拠点とした大学との協働研究システムの確立を提言し、21世紀の教師教育改革のために、学部と大学院が連動して教師教育を推進し、地域の教育

改革を支えるネットワークを形成することをアピールしている。これらの3つの教授会見解と並行して、2001(平成13)年4月に既設の大学院に地域の学校を拠点とした「夜間主・学校改革実践研究コース」(資料2)を試行的に設置し(冊子『学び合う共同体としての学校をつくるために』)、翌2002(平成14)年4月に文部省から正式に認可され開設した。このコースは附属学校園だけではなく、地域の公立・私立学校との協働研究を通して学校の抱える実践的な課題を大学と学校が協働して取り組むコースである。このコースを母体として、福井大学はこの2008年4月に教職大学院を設置した。福井大学の教職大学院(資料3)は、このコースの理念・規模・組織等を一掃拡大し、スタッフも充実した体制で現在進行中である。」

資料1～3は報告書の中に収録されている。報告書の残部は少ないが、関心のある方には配布したいと考えている。



